少年少女日本文学館 20

サアカスの馬・童謡

saakasunouma yasuoka shōtarō
dōyō yoshiyuki junnosuke

安岡章太郎 吉行淳之介 ほか

少年少女日本文学館 20

サアカスの馬・童謡

安岡章太郎 吉行淳之介 ほか

講談社

913

安岡章太郎　吉行淳之介　遠藤周作
阿川弘之　小川国夫　北 杜夫

少年少女日本文学館　20

サアカスの馬・童謡

講談社　1987

310 p　23cm

内容：宿題　サアカスの馬　悪い夏　童謡　最後の殉教者
鱸とおこぜ　人隠し　天井裏の子供たち

やすおかしょうたろう　よしゆきじゅんのすけ　えんどうしゅうさく
あがわひろゆき　おがわくにお　きたもりお

少年少女日本文学館
第二十巻
サアカスの馬・童謡

定価　一四四〇円
（本体　一三九八円）

一九八七年　四月　十八日　第一刷発行
一九九〇年　二月　十八日　第四刷発行
著者……安岡章太郎　吉行淳之介　遠藤周作
阿川弘之　小川国夫　北 杜夫
発行者……野間佐和子
発行所……株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-十二-二十一
郵便番号　一一二
電話　東京（〇三）九四五-一一一一（大代表）

印刷所……株式会社廣済堂
製本所……黒柳製本株式会社

©安岡章太郎　吉行淳之介　遠藤周作
阿川弘之　小川国夫　北 杜夫　一九八七年

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部あてにお願いします。

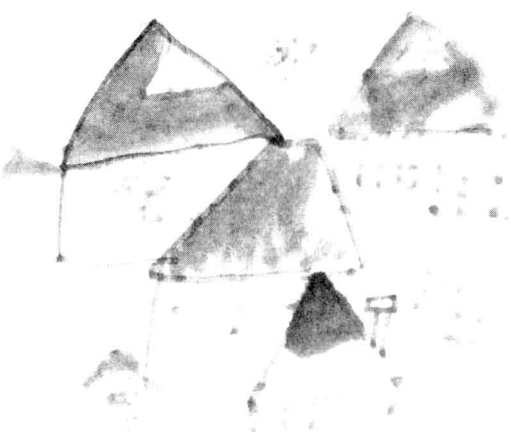
Printed in Japan
ISBN4-06-188270-8　（児一）

もくじ

安岡章太郎
宿題……9
サアカスの馬……59
吉行淳之介
悪い夏……71
童謡……101
遠藤周作
最後の殉教者……125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

阿川弘之
鱸とおこぜ……161
小川国夫
人隠し……189
北杜夫
天井裏の子供たち……213
●解説――佐伯彰一……280
●随筆――なだいなだ……290
●略年譜……296



◆この本の本文表記について

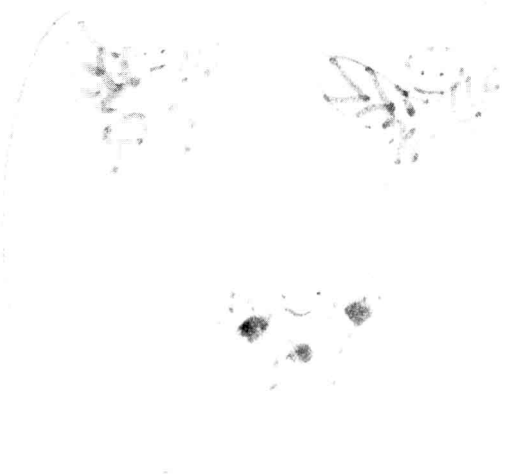
●現代かなづかい、現代送りがなを使用した。

●極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。

●本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。

●さらに説明を必要とする語句や事項には、＊をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

サアカスの馬（うま）・童謡（どうよう）



安岡章太郎

宿題

サアカスの馬

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

宿題

弘前（青森県南西部の都市）の小学校から東京 青山の南学校へ転校したとき僕は五年生になっていた。南学校は府立の中学（一二ページ）へたくさん生徒を入れるのが有名で、母は僕を南学校へ入れるために父が赴任（任地へいくこと）しないうちから東京へ出てくるさわぎだった。母は帝大へ行くためには府立の中学へ入らなければならず、そのためには南学校でなければダメだと信じていた。そのかわり僕が南へ入校することになると、もう府立は大丈夫といかにも官吏（役人の夏）の細君らしい考え方で、すっかり安心した。

弘前では読本（国語の教科書）を標準語の発音でよめるのは教師もふくめて僕だけで、優等生にされるのにはそれで充分だった。先生はときどき「ヤシオカにまけるな」と、前からいる出来る子をはげまし

が、どう努力してみたところで、その点では僕に敵うものではなかった。だから東京へきても僕は読本をよむのは得意だった。僕が読みだすと、まわりが変にシーンとなる。しかし、それが僕の四国弁と東北弁と植民地言葉のごっちゃになったナマリのせいだとは知らなかった。読み方はそれでも、まだよかった。算術や理科となると僕にはまるで見当がつかない。そのはずで五年の一学期がやっとおわろうとしているところなのに、南学校ではもう六年級の学科にとりかかっているのだ。先生は出来ない僕を叱ったつもりでいたが、僕にはそれがすこしも通じなかった。ただ僕を机の前にいつまでも立たせておくだけのことだ。弘前ではちがった。軍縮で廃止になった兵営がそのまま校舎で、教室と廊下とは銃架で分かれており、先生が怒ると子供たちは本物の営倉に入れられた。僕らもその罰がひどすぎるとも思っていなかった。許してやろうとして牢屋に近づく先生を、中から「コケコーロー、コケコーロー」と変なニワトリの鳴きマネで悩ます子もいた。

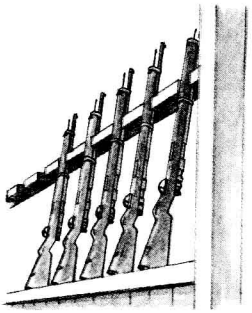
何も知らないうちに、一学期がおわった。通信簿をあけてみると、おかしなことに甲ばかり並んでいた。中学校への内申書のためにそうなっているのだということは、だいぶ後になってわかった。

東京の夏休みは、いやにながったらしい。弘前の夏休みは八月一日からはじまり三十一日でおわったが、東京の学校は七月二十日から八月末日までだ。僕は一日、円タクで鎌倉へ行っただけで毎日一人で家にいたので、すっかりあきた。あらゆる科目の分厚い宿題帖を十冊以上もわたされていたが、そんな物は僕はひろげてみもしなかった。宿題というものがどんなことなのだか僕はしらなかった。学校では、海へも田舎へも行かない子のために「健康体育週間」というのをやっていた。アスファルトの運動場に裸の子どもを立たせて、ゴムのホースで水を浴びせかけたりするのである。僕もそれに三日ばかり出た。僕は、女の子のクビツリ靴という足首でボタンでとめる靴がすきで、それをはいている子は、よく綺麗にみえた。教室には男女組は一つもなかったが、休みなので僕らは一しょに遊んだ。午後からは雨天体操場で、手品や百面相やお話やトーキー映画があった。僕はそのクビツリ靴の女の子のとなりで、それを見ていた。暗くなると、うす黄いろく汚れた窓掛けの幕の上にユラユラ光の波がうごいて、やがてぼんやりと進んでくる軍艦の写真がうつる。軍艦は幕の上でグラグラゆれながら、にょっきり大砲をのばして砲先から白い煙を吐き出す。僕は映写機の方を見るふりをしながら、こっそり隣をのぞきこむ。チカチカ燃えるカー

府立の中学（九ページ）
一九四三（昭和十八）年まで、東京は府制をとっていた。中学校は小学校の課程に続く五年間の男子のみの課程で、義務教育ではなかった。

帝大（九ページ）
明治十九年の「帝国大学令」の公布で東京大学が帝国大学となり、以後、昭和十四年までに京都・東北・九州・北海道・大阪・名古屋の順に帝国大学が設置された。これらの帝国大学は、高級官僚、学者、医師などを独占的に育成する機関であった。

植民地（一〇ページ）
他の国によって経済的に開発され、政治上も主権をもたない属領。一九三一年に中国からきりはなされた満州国は、事実上日本の植民地であり、朝鮮や台湾も日本の領土となっていた。



銃架（一〇ページ）
小銃などをたてかけておく台。

営倉（一〇ページ）
兵営の中にある、規則に反した者などを入れて罰する施設。

甲（一〇ページ）
成績などのもっとも上位のランク。当時の成績評価は、甲、乙、丙、丁の四段階だった。

カーボン（一一ページ）
映写機でフィルムをうつしだす光源。

円タク（一一ページ）
一円タクシー。昭和初期の、東京市内の料金が一円均一だったタクシー。当時、もりそば一まいが十銭（一円の十分の一）、山手線初乗り運賃が五銭だった。また一般の流しのタクシーのことをいう。

トーキー映画（一一ページ）
映像と音声を一致させて映写する映画。トーキーになるまえはサイレント映画といい、弁士が画面にあわせて語っていた。

モダンボーイ
昭和初期、現代風で新しがりやのかっこうをした青年。ちょびひげ、らっぱズボン、ステッキなどに特徴がある。モボ。

ボンの光に青白い顔がうかびだして、ちょっと牛乳みたいなにおいがする。フィルムのすれながら走る音のしばらく後に突然、耳もとのラウドスピーカーから「ドン」と砲弾のハレツする音が聞こえると、いきなりあたりが明るくなる。少女はびっくりして僕を見て笑う。……ところで僕らは芝居ごっこをすることになった。すると、れいの少女は「この人は田舎の*モダンボーイね」と僕の役割をきめた。僕はその言葉がいつまでも気になった。裸で運動場を駈けていると汗でぬれた体に塵がくっつく。僕はその汚れかたが自分だけ特別田舎クサイような気がして、ホースでばしゃばしゃ洗うのだが、いくら洗ってもすぐ汚れてしまう。それきり僕は体育週間をやめにした。

そのとしの夏休みには、従姉のサダカさんの結婚式があった。場所は神田の学士会館だった。僕は前に父と母で西洋料理を食べに行ったことがある。あとで母は僕の洋食のたべ方が見っともなくてボーイに対して恥ずかしかったと言った。そんなことがあるので、僕はその日、ご馳走が心配で、そのことばかり考えて行った。ところが僕の予想は、はずれてしまった。僕は生まれてはじめて*神主を見たのだ。水色の着物に黒の帽子をかぶりポックリ下駄をはいた男が、赤い袴に白い着物の女のひとを家来のように使っているのを見て、これは魔法使いかと思ったくらいだ。

ふり廻す白いオハライが僕の頭の上でサアサアと鳴ったとき、僕はたしかに神様のにおいを嗅いだ。やがてその人は祭壇にむかって意味をなさないウナリ声を上げはじめた。その声はあまりにも奇怪で、窓の外から聞こえてくるものとしか思えなかった。

「へんだな、牛が鳴いてるよ、お母さん。」

ささやきかける僕に、母は青い顔をして、はげしく頭をふったが間にあわなかった。笑いは、たちまち部屋全体に伝染した。僕は無礼者の張本人として部屋から追い出された。恥ずかしい一心で僕は夢中で屋上へかけ上がったが、そこから目のクラむような遠い地面を、アリのように走っている自動車や電車をみていると、さっきまで心配すぎてあんなにイヤだった洋食のご馳走が、いまはもう食べられなくなったと思うにつけて、たまらなくウマそうな気がして来た。……そのことがあって何日もたたないうちに、その結婚式に列席していたサダカさんの叔父さんがピストルで自殺した。

だいたい僕には、芋部という姓からして従姉たちの一族は変に思われる。芋部の家はもと田舎の大金持ちだったが、いまは伯母とサダカさんとその弟の帝国大学一年生の重ちゃんとが三人で、青山のアパートの三階で暮らしている。サダカさんたちの父親は僕がまだ学校へも行かない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com